

神様の畑で

丸山 勉

〔聖書〕 マルコによる福音書 4 章 1～9 節

イエスは、再び湖のほとりで教え始められた。おびたしい群衆が、そばに集まって来た。そこで、イエスは舟に乗って腰を下ろし、湖の上におられたが、群衆は皆、湖畔にいた。イエスはたとえていろいろと教えられ、その中で次のように言われた。「よく聞きなさい。種を蒔く人が種蒔きに出て行った。蒔いている間に、ある種は道端に落ち、鳥が来て食べてしまった。ほかの種は、石だらけで土の少ない所に落ち、そこは土が浅いのですぐ芽を出した。しかし、日が昇ると焼けて、根がないために枯れてしまった。ほかの種は茨の中に落ちた。すると茨が伸びて覆いふさいだので、実を結ばなかった。また、ほかの種は良い土地に落ち、芽生え、育って実を結び、あるものは三十倍、あるものは六十倍、あるものは百倍にもなった。」そして、「聞く耳のある者は聞きなさい」と言われた。

〔序〕 恐れるな、小さい群れよ

新年あけましておめでとうございます。本年もどうぞ宜しくお願い申し上げます。年の初めを、このように一緒に神様を賛美し、私たちをお献げする礼拝から始めさせて頂けることは何と幸いなことかと思えます。今日は特に「招きの聖句」を読みませんでしたけれども、この言葉が頭の中に響いてきましたので、その御言葉を初めに読ませて頂きます。ルカ福音書 12 章 32 節です。

「恐れるな、小さい群れよ。御国を下さることは、あなたがたの父のみこころなのである。」(ルカ 12:32)

これは、主イエス様が祈りのうちに選び、召して下さった 12 弟子（信仰共同体の群れ＝教会）に対して言われた言葉です。御国、それはやがて私たちが迎えられる将来の神の国であると共に、聖霊による主イエスの御臨在が起こっている教会の中で、既に現実となっている神の国です。それが地上でどんなに小さく弱く思える信仰共同体であっても、恐れなくてよいのだ、あなた方の中で始まっている神の国の現実にかそ目を向けて歩めばよい、と励まして下さっています。新年の初めに、心に留めたい言葉だと思いました。

〔1〕 はじめに「種」ありき

主イエス様は、ご存知の通り、多くの譬え話を語られましたが、それは、私たちが主の救いを頂いて生きることがどういうことであるのか、つまり神の国を生きるとはどういう意味を持つのか、そのことを譬えを用いて語って下さいました。

今日は、その原点とも言っても良い、「種蒔きの譬え」から一緒に味わわせて頂きたいと思いました。このイエス様が語られた譬え話ですが、普通の種蒔きとはち

よっと違いますよね。初めから良く耕した土地に種を蒔けばよいのに、どうして道端に落ちたり、石地に蒔かれたりということがあるのか。或いは、茨が成長してしまうような場所は避けて、「ここだったら安心」という場所だけに種を蒔けばいいのに…と思いませんか？ けれども、どうもこれが当時のパレスチナ地方の種蒔きの仕方だったようですね。とにかく沢山種を蒔く。無駄ということのを考えない。この農夫は、**惜しげもなく、種を蒔きたい人**なのです。そして、**神様とはこのようなお方だ**と言っていると思うのです。

これはとても慰められる話ではないでしょうか。**何処にだって種は蒔かれる**。ここで「種」というのは、**御言葉**です。御言葉は、蒔かれる土地を選ばないのだ、ということをもまずこの譬え話は言っているように思います。私たちはこの譬え話を、「どのような土地の種が成長するのか」という、蒔かれる”場所”の問題をすぐに考えてしまいますが、——それももちろん大切なのですが——**この譬え話は「まず土地ありき」というのではなく、「まず種ありき」**なのです。大切な出発点はここです。

なぜこのようなことを強調するかというと、私たちは、この譬え話を自分に当てはめる際、とても**否定的に(ネガティブに)捉えてしまうことが多い**ように思うからです。「熱心でない私は、道端に落っこちた種だ。或いは石地に落っこちた種だ。成長は出来ないのだ」と、もう、自分は**この土地だと決めてかかってしまう、つまり、運命論的に考えてしまう**ということがとすると起こってしまうと思うからです。けれども、この譬え話はそういうことを言いたいのではなくて、「**そうか、今、私は実際、このようにして教会で聖書の言葉、神様の言葉を聞いているではないか。その御言葉に対して私がどう向き合うのか、それを聞いてやり過ごすのではなくて、御言葉を聞いてどう生きるのか、それが問われているのだな**」と理解したいと私は思うのです。

「種」には**命**がありますよね。種は、**生きている**のです。その命を、命として重んじれば、自ずと実を結ぶ。けれどもそれ[御言葉]を軽んじれば、——この世の中の価値基準と同列に置けば——それまでのことです。**そこに宿る大いなる力[聖霊の力]**に与ることがないままになってしまうのではないのでしょうか。

[2] 「良い土地」とは、「にも拘わらず」御言葉を選び取る土地

主イエス様はこの譬えに添えて「**聞く耳のある者は聞きなさい**」(4:9)とおっしゃいました。以前の訳では「**耳ある者は聞け**」となっていました。私たちは耳があっても聴いていないことが実は多いのです。真剣に「聴いて」ゆきたいと思います。真剣に「聴く」ということは闘いです。私たちは(特に私はそうなのですが)聞くことにせっかちに成り易いと思います。聞いたらもうそれで終り。一度聞いたことは「もう知っている」と、もうそこで終わってしまうことが多いのです。そういう誘惑は、「**石地**」の心だと思います。「**考えようとしな**い”心、それが石地なのではないか、私はそう思いました。

そして、譬えの中の、**茨が伸びて、成長をふさいでしまった**という部分ですけれども、これはどう考えたらよいのでしょうか。これ、ちゃんと種は根付いてはいるわけですね。茨が伸びてこなければ、思いがけないアクシデントが無ければ、種は成長するのです。「良い土地」と同じです。ですから、これをただ否定的に考えなくても良いのではないかと思うのです。あとの方のイエス様の解説（18～19 節）で、**「この人たちは御言葉を聞くが、この世の思い煩いや富の誘惑、その他いろいろな欲望が心に入り込み、御言葉を覆いふさいで実らない。」**とおっしゃっています。でも、どうでしょう？ そのような思う煩いや誘惑、欲望などは、日常茶飯事ではないでしょうか？ 仙人のような生活をしていなければ、思い煩い、誘惑などと無縁で生きていくことは出来ないと思います。でもその時には、それがまるで御言葉を覆ってしまって、御言葉がその命を発揮出来ないことになってしまう。そういう時がありますねと、イエス様は、現実を良くご存知でおっしゃっているように私は思います。

そして、「**良い土地**」。種が芽生え育って、あの小さな種から始まったのに、何十倍、百倍もの実を結ぶに至る土地について語られました。これは、私は、「**にも拘わらず**」の土地なのではないかと思いました。生きる思い煩いや誘惑は必ずあります。けれども、それに覆い塞がれないから「良い土地」です。それをイエス様は、4:20 で「**それを聞いて受け入れる人たち**」と言われました。自分を神様から離そうとする力は働くけれども、「**にも拘わらず**」、私は御言葉の方を選びます、という決意です。「良い土地」とは、初めから、良い土地或いは悪い土地、と分かれているものではなく、御言葉を受け入れて「良い土地」になってゆくという**決断**があるのだと思います。

そして面白いことに、道端、石地、茨が伸びてくる地、良い土地、これらは、**みんな「近い」場所**です。この譬え話の中ではそれぞれが遠く離れているようには思えません。どこの土地にもなり得るということではないのでしょうか。そして私は、私たち**川越キリスト教会の歴史もそうであったのではないか**と思うのです。**様々な「時」**を通して今があるわけです。それはまた、**様々な「土地」**です。確かに振り返ると、「神様どうしてこのようなことが？」と思える、試練と言える出来事もいくつもあったと思います。しかし、それで教会はなくなりましたか？ そんなことはなかったわけです。どうしてでしょうか？ **神様はどのような時でも、その御言葉を蒔き続けて下さったから**です。この川越キリスト教会は、「**神様の畑**」なのです。人間はやっぱり弱い者です。変化してしまうことだってあります。けれども、**御言葉は永遠に立つ**のです。御言葉は、御言葉の力を持って、私たちを生かし、力づけ、悔い改めに導き、この信仰共同体を根っこから支えて下さっているのです。**「初めに言葉があった」**（ヨハネ 1:1）。このまことの神の言葉そのものである**主イエス・キリストこそが、教会の大黒柱**です。この方の言葉を今年も聴き続けましょう。御言葉に留まって、今年も一緒に、この川越教会という「神様の畑」を、さらに良き土地となるよう、耕していきたいと思うのです。

[3] 川越教会の今と将来に神様は何を語って下さっているのか

私は昨年は、4月から責任を持たせて頂くようになって、毎週説教を語るという事がこんなに大変なことなのかということを感じさせられました。これは本当に祈らないと続けられない仕事だ、と思わされています。聖霊の導きと助けを頂かないと、ここに立つことが本当に恐くなります。私は前牧師の加藤先生から、説教の原稿をきちっと書くということを指導して頂いて感謝しています。そうすることで、語りっぱなしにならない、それは自分の説教に責任を持つことに繋がるのだな、と思っています。今年も原則的に、そのようにしてゆきたいと思っています。

昨年召された、私の上司、FEBCの元代表であった小林八郎さん（その前牧師でもありました）は、「説教というのは、教会に与えられた御言葉を取次ぐことだ」とおっしゃいました。自分が語りたいから語るのではなく、**今、この信仰共同体に、この神の言葉が語られている、それをじっくりと聞き取り、分かち合える言葉として取次ぐ業が説教なのだ**と学びました。ですから、説教に苦勞して当たり前。真剣に準備し、真剣に語りたいと思います。

そして、皆さんにお願いしたいことは、これは「教会」に与えられた言葉を分かち合うことですので、皆さんも聴いただけで終りにして頂きたくないと思うのです。**反芻**して頂けたら、と思います。基本的に説教原稿を準備しますので、宜しければそれをまた後でお読み頂きたいと思います。そして、何らかの形で、そこで受けた思いを分かち合うことが出来たら良いなあ、と思っているのです。「ここは疑問に思った」でもいいです。それは真剣に聴かなければ出てこないことですから。おこがましいことですが、「聴いた。終わった」では、根を張らないままになってしまうのではないのでしょうか？ 「石地」で終わってしまうのではないのでしょうか？

来週は、来年度にむけての話し合いも少し致します。今考えている事を一つだけ言いますと、来年度は、基本的に「聖書教育」誌に沿いますが、二ヶ月に一度ほどの割合で、私は「**主イエス様の譬え話**」を連続して分かち合うことをしてみたいと思っています。イエス様の譬え話、ここには**福音の奥義が凝縮**されています。そして、私たちへの**慰めと励ましに満ちている**と思うからです。

[結] この「神様の畑」で

神様は**川越キリスト教会**を「**神様の畑**」と見て下さっているのです。と一緒に**農夫**になってこの畑を耕して生きましょう。気持ちの良い汗を流して。

[祈り] 主イエス・キリストの父なる神様、新しい年、私たちを「**神の家族**」として召して下さい感謝致します。私たちは「**神の国**」を目指して今年も歩みを始めます。御言葉の上に歩み、それを土台とし、更にそれを深く味わい、分かち合う群れとなれますように。お互いの中に生きておられる主イエス様のお姿を見、愛と敬意を持って歩む私たちとならせて下さい。主の御名によって祈ります。アーメン。